

質感のある空間をつくるために、最近はおっぱら内装（室内）の仕上げ材にポーターズペイントという特殊なペンキを使います。ペンキと言っても普通のペンキと違い粘度が高く、砂粒のようなものが混ざっている塗料を刷毛で塗るので、左官仕上げ（塗り壁）のような表情になります。刷毛がなぞった軌道や塗料が重なって厚みが増した部分が模様となり、光が当たると反射光が「ゆらぎ」となって豊かな表情が浮かび上がります。人の手仕事の跡がそのまま意匠となって表現されます。

クロスと比べるとコストも手間もかかりますが、圧倒的に空間の質が上がりますし、やっただけの価値が得られるので、積極的に使っています。

他にも今回の内覧会の会場になる家では「質感」に拘って、素材本来の素直な表情が意匠となって現れる様に工夫を凝らしています。

例えば和室の壁と天井には、シンプルで無表情な真っ白い和紙を重ね貼りました。見た目が柔らかくてマットな質感の素材なので、そのまま貼ると淡白で素材感が出ないので、継ぎ目を重ねて貼り進めました。そうすると、重なった部分がアクセントとなって空間にリズム感が出て、和紙の質感との相乗効果で清楚で締まった和室になりました。

また、一部の壁と天井を漆喰の左官仕上げにしました。漆喰を固くコテで押さえながらフラットに仕上げると、マットな部分と光沢の出る部分ができます。言い換えれば、ムラができるということなのですが、そのムラがとても重要な意匠となっています。一般的にはムラが出ることを嫌いますが、素材そのものを活かした意匠をテーマとしているので、作画的にムラをつけています。そのような空間にインテリアの主役である家具や生活雑貨を配置すると、さらに豊かな空間になります。

最近健康志向のニーズも高まり、自然素材を内装仕上げ材として使用することが多くなりました。大手のハウスメーカー

素材のちから。

zuiun便り vol.56

でも、床に無垢のフローリングを貼ったり、壁や天井に無垢の羽目板を貼るようになったようです。規模の大きい会社ほど、取扱いの難しい自然素材を使うのを敬遠していましたが、自然素材の良し悪しの理解やメンテナンス方法の知識も深まり、家づくりの材料として身近になりました。

とは言っても、「新建材」と言われている、木目がプリントされているフローリングや建具（ドア）は、まだまだ住宅の現場では主流です。メンテナンスもしやすいですし、施工も簡単なので、現在でもほとんどの住宅に使われています。技術の進化もあり、素人目では見分ける事のできないくらいクオリティーの高さです。そういうものは比較的高価なものとして扱われていますが、プリントされたリアルな木目であっても、その木目は規則性のあるパターンになっていて、自然素材のような「ゆらぎ」が出ないので自然素材で構成された空間にそれを配置すると、だんだんと浮いた存在になっていきます。なぜなら、新建材と自然素材の違いは劣化した時の表情だからです。自然素材は、劣化というより味が出てそれが風合いになります。ビントリージのデニムのような感覚で風合いを育てる事もできます。それに比べ、新建材は傷一つが致命的に劣化となって見栄えが悪くなってきます。家の外壁でよく使われているタイル調や左官調のサイディングは、新築時から年月が経つにつれ劣化していき、10年から15年程度でメンテナンスをし、美観を整えなければ、見るに絶えない外観になってしまうので、なるべくそういうものは使わない様になっています。できれば、ガルバリウム鋼板か本物のタイル、木を外壁に使う方が長期的にはメンテナンス費用を抑えることができます。

東京オリンピックのメインスタジアムであった国立競技場も木造の技術が使われていますが、サステイナブルの観点から、木造だと部分的に改修できるメリットがあるので、木造が採用されたようです。永く住む事になる家の素材は、永く愛せる素材でつくりたいものです。